

議員団 ニュース

日本共産党平塚市議会議員団
 団長 渡辺 敏光
 電話・fax 31-6431
 w-toshi@agate.plala.or.jp
 松本 敏子
 電話・fax 59-4607
 mail@matsumoto-toshiko.jp

日本共産党平塚市議会議員団
 電話 0463-23-1111 (内線 2375)
 平塚市浅間町9-1 平塚市議会控室

日本共産党議員団の法律相談
 今回は1月9日です。
 午後1時 (要予約)

No.1058 2010年1月10日発行

本年もよろしく お願いいたします



昨年暮れには、日本共産党平塚市委員会と有志による「平塚年越し派遣村」を開設し、大みそかと元旦の2日間炊き出しと相談会を行いました。2日間で計66人の方が訪れ、食事をとり、これからのことを話し合いました。

今回の「年越し派遣村」開設にあたりましては、多くの方々からご支援いただき本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

役所が開いた4日からは、相談に来られた方々の生活、健康、住まいなどの問題解決に取り組んでいます。政権交代で明けた今年こそ、大企業にしっかりと雇用責任を果たさせ、労働者派遣法の抜本改正など人間らしく働ける条件を広げていきましょう。「雇用の破壊」が即「生活の破壊」となる悪循環をストップさせ、安心して暮らせる社会を築くために、今年も皆さんと力を合わせて頑張ります。

日本共産党平塚市議会議員団長
 渡辺 敏光議員 (中央)
 同市議会議員
 松本 敏子議員 (右)
 日本共産党平塚市委員会
 くらし・福祉相談室長
 高山 和義 (左)

心にゆとりをもち、仲間と一緒に 夢に向かって前進しよう！

平塚市議会議員
 渡辺 敏光



職を失い、収入がなく、食事に事欠く方からの相談で、共通しているのは、「これ以上、知人に頼れない」、「相談できる人がいない」ということです。
 これらの相談を受けながら、自身の学生時代の頃を思い出しました。バイトをしなければ食べていけない立場でありながら、学生運動に専念しなければならなくなりました。仲間たちの「援助するから」という声もありましたが、そうは甘えられるものではありません。絶えず空腹で活動をしなければならぬこの辛さは、経験したものでなければわかりません。逃げ出したくなることもありません。

ります。
 しかし、どんな困難なかにも、心はブレキがかかり、踏みとどまることができたのは、一緒に頑張っている仲間たちを裏切ることができない、ということ。そして仲間と絶えず確認しあっている「夢」と、その実現への「展望」をもっていったからだ。と今、感じています。
 一定の年齢に達して、職を失うことと、学生運動とは厳しさが違う、と言われるかと思えます。もちろん年がたつと違いますが、しかしどんな年齢になっても、どんな境遇になっても、「仲間（親友）」と「夢（展望）」は、生きる力の源泉であるはずで。
 ならば、「頼れる人がいない」という方の相談にたいしては、「仲間」として接し、展望をもつ努力を一緒にできればと思います。
心にゆとりをもち、やさしくなろう！
 小泉元首相の構造改革政治の時、「自己責任」ということがよく言われました。

この政治が間違っていたことはすでに明らかです。しかし一人一人の意識の中には、一程度定着しているのでは、と思うことがあります。
 私の回りでも、たとえば生活保護を受ける方々にたいして、社会的背景を抜きにし、「自己責任」という面からだけ、認識することが多いように思われます。
 もちろん今、だれもがゆとりがなく、追いつめられながら生活している方が多くいます。だからこそ今、心にゆとりをもつことが大事ではないでしょうか。
 それは私自身にも言い聞かせていることです。そうでなければ、だれにたいしてもやさしくなれなくなってしまう。いよいよ7月には参議院選挙、そして15カ月後にはいっせいで地方選挙。市民のみなさんが望む「変化」を確かなものにするためにも、ぜひお力をお貸し下さい。期待に応えるため、精一杯頑張ります。
 2010年、今年もどうぞよろしくお願い致します。

電話・ファックス・メールで皆さんからのご意見・ご要望をお寄せください。

昔はみんな苦しかった だからみんな「お互い様!」だった

平塚市議会議員
松本 敏子



最近、年のせいとか時々昔のことを考えることがあります。私がまだ小さかった昭和30年代、どこの家も貧乏でした。我が家もご多分にもれず貧しく、農家ではなかったために、毎日の食事に白い米を使うのはもったいないと、当時の池田総理大臣の失言とされる「貧乏人は麦飯を」を逆手にとつて、当時、栄養不足から脚気になる人が多かったこともあり「体にいいから」と麦を加えた御飯を食べたものでした。

当時、私を含め小中学生が3人。一度に学級費や給食費を請求される母はたまりません。当日の朝に出した子に「なぜ、昨日のうちに言わないか!」と叱りながら、近所まで借りに行くこともし

ばしばでした。

あの当時は、まだ戦争からの復興期。誰もが必死に生きる道を模索し、誰もが苦しいから恥も外聞もなかった。だから、「お互い様」という思いの中から、生きる元気が出ていたのかもしれない。

働くところも住むところもない人がいけば、「うちの工場（こうば）で働くか？飯くらい食わせるよ。」と助けられ、そこで身に付けた技術を見込まれて、新しい店を出してもらうなんて話もよく聞いたものでした。

家を出ても働ける仕事がないから、家族みんな一つ屋根の下で、喧嘩しながらでも助け合って生きてきた。

それが、なぜ今、「うちも苦しいけど、お前一人くらいならなんとかなるさ。家で働いてみるか？」と言えない状況なのだろうか・・・。

今、なかなか人を信じるのが難しくなってきたこともあり、不安です。展望が見えない今の社会、「自分たち家族が生きていく

のがやつと」という気持ちから解放されることがありません。

税金はどんどん増え、年金や健康保険、介護保険料は次々値上げされ、若者は家を出たが自分の生活がやつと。親は、国民年金を頑張って払ってきたけどそれでは生きていけない。

親が弱音をはくと、養う力がないう子どもと親の間に溝が生まれてしまうのです。

大企業の税金を減らしてその穴埋めを国民に負担させるから税金が増える。非正規雇用や不当な派遣切りなどが横行するから、若者が結婚して子供を育てるという当たり前の生活が出来ず、親にまで冷たくあたってしまう。

家族の助け合いや温かい家庭を築きにくくしたのは、政治が国民に向いていないからです。もっと、生きていく人々に光を当てた政治にしないと!

今こそ、大企業優遇政治の犠牲になったのは「お互い様」の精神で、国民のための政治に切り替えていきましょう!

「花菜ガーデン」開園に先駆け 寺田縄のいちご農家で「摘み取り」始まる



この3月に県と市の協調事業である、花と緑のふれあい拠点「花菜ガーデン」が寺田縄に開園します。

周辺のいちご農家では、それに先駆け1月3日からいちごの摘み取り体験を開始しました。

各ハウスの中では、「紅ほっぺ」「とちおとめ」「さちのか」の品種が真っ赤な実をたわわに付けています。



初日の3日、地元に住む松本敏子議員は今年から「摘み取り体験」を行ういちご農家6軒を訪ね、状況を伺ってきました。

インターネットで知ったという人や、「臨月だけれど近くだから行けるね」といって出かけてきたという人など、どの農園にもお客様が来始めていました。



昨年心配した「ミツバチ」も今年は順調に入荷しているということで、温度管理もしっかりされていました。どの家も親の代から出荷しているベテラン農家です。

そばには、花菜ガーデンのシンボル「カレルチャペックの家」がよく見え、いよいよ開園間近ということを感じます。